

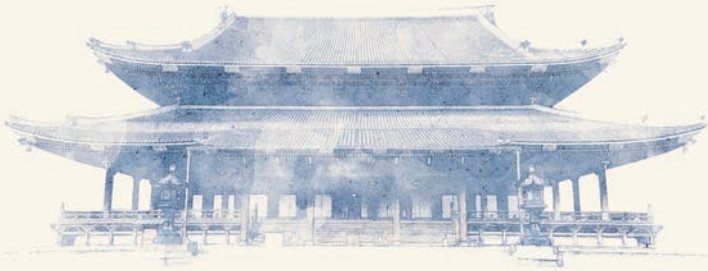
草野顯之

本願寺の軌跡

ものがたり

— 創建から東西分派、

そして現代へ —



東本願寺出版



親鸞聖人「安城御影」(東本願寺蔵)

1255（建長7）年、83歳の時の親鸞聖人を描いた画。

三河国（愛知県）の安城に伝わったことから、「安城御影」と呼ばれる。

第3章 覚如上人の継職と本願寺号公称

覚如上人の継職

寺号の公称と本尊の安置

本願寺本寺化の意図―三代伝持の血脈

はじめに

第4章 衰微時代の本願寺

第1章 親鸞聖人の示寂と大谷廟堂の創建

親鸞聖人の示寂

大谷廟堂の創立

覚信尼の敷地寄進

覚信尼の寄進の意図

第2章 大谷廟堂の動揺

覚信尼の寄進と大谷一族

覚恵への譲りと唯善

唯善事件

唯善の行動の背景

第5章 蓮如上人の継職と真宗再興

蓮如上人の誕生と当時の本願寺

本願寺継職と寛正の法難

吉崎坊の開創

一向一揆と吉崎退去

第6章 山科本願寺の創建

畿内の布教 48

山科本願寺の創建 49

山科本願寺と寺内町 52

蓮如教団の全国的拡大 53

晩年と大坂坊 55

第7章 本願寺の大坂移転と権門化

実如・証如・顕如 三上人の時代 56

戦国乱世と本願寺の大坂移転 56

本願寺教団の組織化・制度化 60

本願寺の権門化 61

親鸞三百回忌 63

第8章 石山合戦と東西分派

織田信長との10年戦争―石山合戦 64

教如上人の籠城と流浪 66

教如上人、本願寺への復帰と継職 68

教如上人隠退と真宗本廟(東本願寺)の創立 69

第9章 江戸時代から近現代の真宗本廟

明暦・寛文度の両堂再建 72

両堂の再建と再々の焼失 73

明治の両堂再建 76

真宗本廟両堂等御修復 78

本廟創立七百五十年 79

〈付録〉真宗本廟(東本願寺)年表 80

あとがき 87

はじめに

浄土真宗の宗祖・親鸞聖人の示寂の後、京都の東山に小さな御墓所である「大谷廟堂」が建てられました。このお堂こそが、本願寺の起源なのです。その大谷廟堂が、どのような経緯で「本願寺」になり、なぜ東西本願寺へと分かれ、現在へ至ったのでしょうか。本書では、本願寺の始まりである大谷廟堂の創建から、長い年月の中、幾多の変遷を経て生じた分派の流れをたどり、特に現在の東本願寺へと発展する軌跡を訪ねていきます。

東本願寺は、正式な名称を「真宗本願」といいます。真宗本廟とは、親鸞聖人の御真影（木像）を安置する御影堂および本尊・阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂を中心とする聖域であり、真宗大谷派の崇敬の中心、また教法宣布の根本道場です。それを真宗本廟と称する



のは、真宗を開顕かいけんされた親鸞聖人の御墓所である大谷廟堂を起源とするからであり、聖人の御真影の前で教えを聞きあう根本の道場という意味があるからです。

真宗本廟（東本願寺）が現在ののように巨大な両堂と、広大な寺地を有するに至るには、長い年月にわたってこの本廟を護り、教えを相続することに努められた先人達のご苦勞と、真宗本廟に対する崇敬の懇念こんねんがあったのです。

廟堂の創建に始まり、衰微時代を経て蓮如上人の再興さいこう、さらに戦国乱世に巻き込まれ、織田信長や豊臣秀吉ひでよし、徳川家康などの名だたる武将との関わりの中で生じた東西分派、そして江戸時代から明治にかけての四度の火災による焼失と再建さいけん……。これらどれ一つとっても、そこには真宗に生きた人々の教えを伝えんとする志願が流れています。これからご一緒に、その歴史と伝統の物語をひも解いていきましょう。



第1章

親鸞聖人の示寂と 大谷廟堂の創建

親鸞聖人の示寂

親鸞聖人は、1262（弘長2）年11月28日に90年の生涯を閉じられました。その経緯については、曾孫の本願寺第3代覚如上人による親鸞聖人の生涯を描いた絵巻物『親鸞伝絵』（『御伝鈔』）に詳しく記されています。そこには、“聖人は弘長2年11月下旬の頃から少し病気気味になられ、それより後は、世俗のことは口にせず、ただ仏恩の深いことのみを述べられました。他の言葉を声に出されることはなく、専ら称名念仏の絶えることはありませんでした。そして同月28日の午時、頭北面西右脇に臥され

て、ついに念仏の息が絶えられた”と叙述されています。極めて穏やかな最期でありました。

そして葬送については、お住いは京都左京のあたりの、押小路南・万里小路東にありましたから、そこから遠く賀茂河東の路を通って、京都の東山の麓・鳥部野の延仁寺という所で茶毘に付されたのであります。この鳥部野とは、当時の京都の葬送地として著名な場所です。京都の東山、現在の清水寺から西大谷（大谷本廟）の付近を指しています。ただ、延仁寺という場所は詳らかではありません。

茶毘に付され収骨された聖人のご遺骨は、同じ鳥

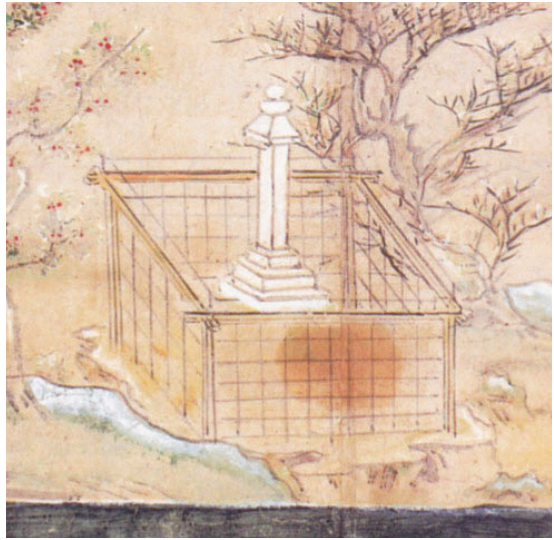




聖人示寂の図「本願寺聖人伝絵（康永本）」（東本願寺蔵）



聖人茶毘の図「本願寺聖人伝絵（康永本）」（東本願寺蔵）



親鸞墓所の図「本願寺聖人親鸞伝絵（弘願本）」（東本願寺蔵）

部野の北のはずれの大谷という所に納められました。大谷という地名は残っていませんが、現在の知恩院ちおんいんの敷地付近に相当するようであります。当初は一般的な墓のように、墓標として四角の石柱に笠かさをのせた笠塔婆かさとうばが建てられ、その回りを垣で囲うという簡素なものでありました。

大谷廟堂の創立

ところが10年後の1272（文永9）年の冬の頃に、この墳墓ふんぼが改葬されました。当初の墓所からもう少し西の吉水よしみずの北のはずれに遺骨を掘り移し、仏堂を建てて親鸞聖人の影像えいざう（御真影ごしんねい）を安置しました。この堂が「大谷廟堂」と呼ばれたのです。場所は現在



大谷本願寺故地（崇泰院）